

知家の歌における古典撰取の様相と変遷

— 諸歌人との対比において —

岩 崎 禮 太 郎

中世の初頭の歌壇において、六条家と御子左家とは激しく対立していたが、六百番歌合・千五百番歌合をめぐって、六条家は御子左家に敗北している。

本稿で取り上げる知家（一一八二～一二五八）は、六条家の顕家（顕輔の孫）の子息である。彼の歌は『新古今和歌集』（寛宴は一二〇五）には一首だけ入集している。知家はやがて御子左家の定家（一一六二～一二四一）の門人となってその愛顧を受け（明月記承元元年八月十一日の条）、定家の子息である為家（一一九八～一二六五）とも親しく、定家が単独で撰者となった『新勅撰和歌集』（実質的完成は一二三三～一二三五）には十二首も採られている。しかしながら、定家の没後、知家（出家して蓮性）は光俊（出家して真観）（一二〇三～一二七六）と連携して、御子左家の為家に反旗をひるがえしている。そうして、宝治三年（一二四七）の「院御歌合」における為家の判に不服であった知家は、「蓮性陳状」を後嵯峨上皇に奉っているのである。

ところで、為家に反旗をひるがえした、この反御子左派の歌風の特徴の一つとして、「万葉をかなり尊重し、万葉歌を本歌に取る場合の多かつたこと」が挙げられる。

このことに関連して、本稿では、知家の歌における古典撰取の様相と変遷とを、建保期・貞永期・宝治期にわたって考察してみた。

このことについて、中世初頭の建久期における六条家の顕昭（知家の祖父重家の弟）の万葉撰取の様相と比較し、さらに建保期・貞永期・宝治期における定家や為家の古典撰取の様相と比較しながら考えてゆきたい。

二

さかのぼって、六条家の顕昭の万葉撰取に対する態度から考えよう。

「六百番歌合」（詠進は建久四年・一一九三で、判進はその翌年か）における顕昭の万葉撰取歌は二十三首（本歌取7・万葉語使用16）であった。

その中に、

入日さす豊旗雲も何ならず月なき恋の闇し晴れねば(恋六・宿雲恋)

(本歌) 万葉・1・15「わたつみの豊旗雲に入日見し今夜の月夜さやかに照りこそ」

鯨とるかしこき海の底までも君だにすまば浪路しのがむ(恋七・寄海恋)

(本歌) 万葉・13・三三三九「……鯨魚取り海ちに出でて……かしこき海を直渡りけむ」

などがあるが、「入日さす……」の歌は「豊旗雲などことごとしく聞ゆれど」と難陳を受け、「鯨とる……」の歌は俊成から、「鯨とる」という語は「狂歌体の歌」「いとおそろしくきこゆ」と批判されていゝる。万葉語という特異性ばかりが際立って、「首全体の調和を乱す」という危険に陥っているといふべきであろう。

万葉語を撰取することについて、俊成は「六百番歌合」の判詞に
おいて、

「万葉集は優なる事をとるべきなりとぞ故人も申し侍りし」(春上・元日宴・五番)

「万葉集にもとり出でて宜かるべき事を詠むべきなり」(冬下・衾・二十番)

と述べ、後に為家は、

万葉集の歌などの中にこそ、うつくしくありぬべき事のなびやかにもくいだらで、よき詞わろき詞まじりて聞きにくきを、やさしくしなしたるも、珍しき風情に聞ゆれ。(「詠歌一体」「古歌を取

る事」)

と述べている。このように、御子左家の歌人たちは、雑多な詞の混じった万葉歌から撰取するにあたって、「優しくしなし」て「珍しき風情」を出すことを目標として、万葉語を一首の中に十分に生かすことを考え、かつ実践していたのである。

六条家と御子左家とが激しく対立して争った建久期において、六条家の顕昭は「やまと歌は万葉を本体と侍る」(「六百番歌合」恋七・寄海恋・七番の「陳状」)と主張し、御子左家の俊成は「歌の本体にはただ古今集を仰ぎ信ずべきことなり」(「古采風体抄」初撰本建久八年(一一九七))と断言している。このように「歌の本体」とするものは異っていたが、御子左家の俊成・定家は万葉集にも関心を寄せ、万葉歌から「優なること」を撰取して詠んだ歌がかなりあったのである。また、定家に学んだ六条家の知家も、建保・貞永期には、古今集をはじめ三代集を本歌として詠んだ歌がかなりあったのである。

ここに、建久期以降の百首および五十首における、主要歌人の万葉歌をふまえた歌の数を〔第一表〕〔第二表〕として掲げる。

(「万葉語使用」として掲げたのは、本歌取とまでは言えないであろうが、万葉語を一つだけ取り入れた歌である。)

〔第一表〕建久・正治・建仁期における、万葉歌をふまえた歌

(下欄の数字は計を示す。以下同じ。)

顕昭	俊成女		家隆		定家		俊成		
	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	万葉歌の本歌取	
16	7	/	1	3	1	2	/	建久百首 建仁四年 建久三年	
23			4		3				
/	/	/	4		4		10	正治初度 正治二年 正治〇年	
			4		4		10		
9	7	/	2	5		9	4	4	建久百首 建仁元年 建久二年
16			7		9		8		

知家の歌における古典撰取の様相と変遷

〔第二表〕建保・貞永・宝治期における、万葉歌をふまえた歌

基家		範宗		行能		光俊		知家		為家		俊成女		家隆		定家				
万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	同右本歌取	万葉語使用	万葉歌の本歌取			
/	/	7	1	3	/	1	17	/	/	6	12	1	18	/	/	/	建久百首 建保三年 建久五年	内裏名所 五首		
		7	4	18		6	12			19										
/	/	1	1	2	/	3	/	/	/	2	3	4	4	/	/	/	承久二年 建久二年 建久〇年	王道助法親 五十首		
		1	3	3		5				4	4									
5	2	2	5	14	1	4	5	6	3	2	12	1	4	2	4	2	4	1	家百首 貞永元年 貞永二年	洞院撰政 百首
5	4	4	19	5	5	11	5	5	5	1	5	1	6	6	6	6	6	6	2	宝治二年 院百首 一二四八
5	4	/	4	5	1	7	12	15	2	4	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
9			9	8	27	6	0													

三

建保三年の「内裏名所百首」における、万葉歌をふまえた歌を見ると、定家では十九首を数えることができ、六条家の知家の十八首より一首だけ多い。

この百首における定家のそれは、たとえば、

蟬の羽の衣に秋をまつらがたひれふる山のくれぞ涼しき（夏・松浦山）

（本歌）万・5・八六八「松浦がたきよひめの子がひれふりし山の名のみや聞きつつをらむ」

のように、優なる歌になっている。

この百首における知家の、万葉歌をふまえた歌は十八首で、たとえば、

かざし折る跡もふりゆく三輪の山いくよ檜原の霞みきぬらむ
（春・三輪山）

（本歌）万・7・一一八「いにしへにありけむ人もわがごとか三輪の檜原にかざし折りけむ」

のように、優なる歌になっている。

次に、「洞院撰政家百首」における、万葉歌をふまえた歌を見ると、定家においては急に減じて六首となっている。それは、

久にふる三室の山のさかきばぞ月日はゆけど色もかはらぬ（祝）

（本歌）万・13・三三三「月日は行きかはれども久にふるみもろの山の離宮地」

のように、優なる歌になっている。

次に、この百首における為家の、万葉歌をふまえた歌は五首であつて、たとえば、

天の川遠き渡りになりけりかた野のみ野の五月雨のところ（夏・五月雨）（続拾遺・夏・入集）

（本歌）万・10・二〇五五「天の河遠き渡りはなけれども君が舟出は年にこそ持て」

のように、万葉語を一首全体に調和させて、優なる歌にしている。次に、この百首における、知家の、万葉歌をふまえた歌は十一首であつて、たとえば、

恨みわびかきもやられず水くきのをかのくず原かへるならひに
（後朝恋）

（本歌）万・12・三〇六八「水葦の岡のくず葉を吹きかへし面知る子らが見えぬ頃かも」古今・恋五・八二三平定文「秋風の吹きうら返すくすの葉のうらみてもなほ恨めしきかな」のように、本歌の言葉を取って、それを一首全体に調和させて、優なる歌にしている。

四

建保期（「内裏名所百首」）・貞永期（「洞院撰政家百首」）・宝治期（「宝治二年院百首」）の百首歌における定家・為家・知家の古典撰取について、そのもととなった古典別に調査すると、「第三表」のようになる。

〔第三表〕

為家	定家														
	万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺 金葉	24 3 3 6 1	伊勢物語 源氏物語 紫式部日記 更級日記	1 1 1 5	内裏名所百首 建保三年 一二二五	洞院撰政家百首 貞永元年 一二三二	宝治二年院百首 一二四八	万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺	15 3 5 2	伊勢物語 源氏物語	3 1	〔百首のうち伝わっている六十三首について〕	万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺 伊勢物語	5 8 1 2 4 1	万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺 伊勢物語 狭衣物語

知家の歌における古典撰取の様相と変遷

知家		万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺 新古今 (重之の歌)	18 21 4 6 1 1	源氏物語 伊勢物語 古今六帖	3 1 1
知家		万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺 新古今 (重之の歌)	11 20 3 3 1 1	伊勢物語	1
知家		万葉 古 後撰 拾遺 後拾遺	27 3 4	狭衣物語	1

この〔第三表〕を見ると、知家の古典撰取の上に大きな変化があったことが知られる。建保期と貞永期には三代集の撰取が多かったのに、宝治期になると急にそれが減じて、万葉歌の撰取が急増していることが知られるのである。そもそも、知家は定家の教えを受け、定家を目をかけられ、新古今集には一首の入集であったが、新勅撰集に十二首撰入され、為家と兄弟のように親しく交わっていた(源承和歌口伝)ころは、三代集を尊重して、本歌取は古今集からのものが最も多かったのである。しかし、定家の没(一二四一)して後は、三代集を絶対的な規範とする、きわめて保守的な為家の歌風に反感をいだき、「光俊(真観)と連携して、寛元四年(一二四六)頃から御子左派に反旗をひるがえした。その頃から知家は、万葉集を尊重する父祖の家学に目ざめ、万葉歌をふまえた歌が急激に増加するとともに、三代集からの撰取が急激に減少したのであると

考えられる。

「宝治二年院百首」(一二四八)における、為家の、万葉歌をふまえた歌は六首である。(古今集からの本歌取は十二首ある。)その六首をあげると、

いつしかとあまのかぐ山をりはへてほすや霞の春の衣手(春・山霞)

(本歌) 万・1・二八「春過ぎて夏きたるらし白たへの衣ほし
たり天の香具山」

ときつ風寒く吹くらしかすひ瀉しほひの千鳥夜はに鳴くなり
(冬・瀉千鳥) (統古今・冬・入集)

(本歌) 万・6・九五八「時つ風吹くべくなりぬ香椎瀉潮干の
浦に玉藻刈りてな」

みつしほの波のした草いやましにみらくぞ人のとほざかり行く
(寄草恋) (新千載・恋四・入集)

「みらく」の用例は万葉に8例あり、勅撰集では拾遺の万葉歌「坂上郡女の歌
1例の後は統古今の定家の歌まで用例なし」

夕づく日さすやむかひの岡のへにみかくれわたる露の玉ささ
(本歌) 万・16・三八二〇「夕づく日さすや川辺につくる屋の
形をよろしもうべよそりけり」

つらきかな山の柚木のわれながらうつつすみなはにひかぬ心は
(雑・杣山) (新拾遺・雑下・入集)

(本歌) 万・11・二六四八「かにかくに物は思はじ飛弾人の打
つつすみなはのただ一道に」

あきつ鳥くにつやしろのあきらけくまもりはぐくむ御代の久し

き(寄社祝)

(「あきつしま」の用例は、万葉集に5例、日本書紀の歌に1例あり、中古の勅撰集には用例がない。)

次に、「宝治二年院百首」における、知家の、万葉歌をふまえた歌は、二十七首という多数にのぼっている。

その二十七首の中で、優なるさまの歌にしているものが二十二首ある。そのいくつかの歌をあげる。

こほりせし山のたるみの音たてていま春雨も岩たたくなる(春・春雨)

(本歌) 万・8・一四一八「石はしる垂水の上のさわらびの萌
え出づる春になりにけるかも」

たれしかも雲井はるかにとよ国のゆふ山いつる月をみるらん
(秋・山月) (統古今・秋上・入集)

(参考歌) 万・10・二三四一「思ひ出づる時はすべなみ豊國の
木綿山雪の消ぬべく思ほゆ」

いなみののあさちが原にしく露やよどかる月の夜どこ成らん
(秋・野月)

(本歌) 万・7・一一七九「家にしてわれは恋ひなむ印南野の
浅茅が上に照りし月夜を」

その他の該当の歌は、紙幅の関係があるので、知家の歌の初句と、その歌が撰取したものととの歌の、万葉集における歌番号とを記す。

国すらが(二九一九) あま人も(三六〇〇) すみだ川(一〇七七)
秋はいぬ(三九八六) 雲の上に(八〇四) 夕波の(三五〇三) 人

をいかに (五〇二、五二二) 人しれぬ (一一六二) 涙せく (拾遺七〇二、人麿) 過ぎ来つる (三〇六五) 神さぶる (四三三〇) 竹の葉も (九五二) あはしまの (三五八) こよひもや (一六七七) ふるざとと (一一三四) しのはらや (七) けふくれぬ (一一五三) 風わたる (三五八) 代々かけて (一一三三) しかしながら、右とは違つて、知家には、万葉歌から撰取することによって、優ならざるさまになつてゐると考えられる歌が五首ある。その五首をあげる。

む月たち春にはなりぬ三輪山の杉のえしぎ朝霞せよ (春・山霞)

(本歌) 万・五・八一五「むつき立ち春のきたらばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」

この歌は、万葉歌から「むつきたち春」の言葉を取つて、初二句は優に詠んでゐるけれど、「杉のえしぎ」の言葉が一首全体の調和を乱してゐると思われる。「しのぐ」は万葉語であつて、たとえば「奥山の菅の葉しぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね」(万・三・二九九) においては、雪の盛んに降るさまを表わして効果的であるが、この知家の歌における「杉のえしぎ」という語は、万葉語という特異性のみが目だつて、「朝霞せよ」にかかると言葉としては強すぎて一首の調和を破つてゐると思われる。

みれば又松にひかれていやとしにさても木たかくさける藤波

(春・松山藤)

(参考歌) 万・一九・四二二九「新しき年の初めはいや年に雪踏み平し常かくにもが」

知家の歌における古典撰取の様相と変遷

この歌は、万葉歌から「いや年に」を取つてゐるが、この万葉語を用いる必然性が感じられず、この語の万葉語という特異性のみが目だち、浮き上つてゐる感がある。同意語の「年ごと」が、勅撰集では、古今三例、後撰に1例、拾遺に4例、後拾遺に2例、金葉に3例、新古今に1例というように用いられていて、この場合もその方が落ち着いてよいように思われる。

さわた川水の心もあらはれて袖つくばかりふれる白ゆき (冬・浅雪)

(本歌) 万・七・一三八一「広瀬川袖つくばかり浅きをや心深めてわが思へるらむ」

この歌においては、「袖つくばかり」を万葉歌から取つてゐるが、この語句が全く晦渋な表現になつてゐる。本歌である万葉集の歌は、日本古典文学大系の現代語訳によると、「広瀬川は長い袖が水面につきそうな(歩いて渡れる)くらい浅いのにな……」となつてゐる。万葉集評釈(窪田空穂氏)には、「へ袖つくばかり」は浅さを具体的に現そうとしてゐるものであるが、その状態がはっきりしかねるうらみがある。」と書かれてゐる。この知家の歌は、自由な表現を目ざして、着想の奇をねらつて本歌取したのであるが、「浅雪」を表現する歌として、全く晦渋な歌になつてゐる。

見しままに床もはなれぬつけ枕されども人は行ふやはしる (恋・寄枕恋)

(本歌) 万・一一・二五〇三「夕されば床の迎去らぬつけ枕何しか汝が主待ちがたき」

この歌では、「床もはなれぬつけ枕」の語句はほとんど万葉の本歌

のままであるが、一首全体としては、「つげ枕」と「人」とを対照的にとらえて理知的に詠むという趣向をこらしている。しかしながら、本歌の擬人的表現に情感がこもっているのに対して、知家の歌は下の句の表現が粗雑というべきであろう。この百首における「寄枕恋」題について、他の歌人の歌、

とどめばや涙のみをのうき枕そをだにありしかたみばかりに

為家

見るもうしありし夜床のすが枕ながくや人におきわかれけん

(新千載、入集)

真観

思ふこと枕ばかりはしるなればかかる涙の色も見るらん

俊成卿女

と比べると、知家の歌は情感が稀薄であると思われる。

さしながら千代もやへなん朝づくひむかふつげくしひさにふり

つつ(雑・寄日祝)

(本歌) 万・11・二五〇〇「朝づく日向ふつげくしふりぬれど

何しか君が見れど飽かざらむ」

この歌の本歌取は、万葉歌の相聞の歌を祝の歌に変えている点にもしろい趣向がある。しかしながら、この知家の歌において、「朝づく日」は「向ふ」の枕詞であり、「向ふつげくし」は「左右向き合いにさすつげくし」の意で、「くし」は古くなりやすいので「ふる」の序詞となっていると考えられ、この歌は、歌題の「寄日祝」というよりは、「櫛に寄する祝」の歌ともいうべきものになっているのは、大きな難点である。ちなみに、この百首における「寄日祝」題の歌で、他の歌人のを見ると、次のように歌題に適合した詠

み方になっている。

世を照らすよもの光も君がため我が日の本といではじめけり

為家

あきらけき時代と誰かしらざらんとよさかのぼる峰の朝日に

真観

あまてるや空にくもらぬ日の御影すまん限りの我が君のため

俊成卿女

さきに〔第三表〕において見たように、知家は、和歌の師である定家の生存中は、御子左家の方針に従って三代集を大いに尊重し、三代集からの撰取が万葉からの撰取をはるかに上まわっていたのであるが、御子左家に反旗をひるがえした後の「宝治二年院百首」においては、知家は万葉歌をふまえた歌を二十七首という多数を詠んでいるのに対して、古今集をふまえた歌はわずかに三首しか詠んでいない。その三首をあげる。

む月たち春にはりぬ三輪山の杉のえしのぎ朝霞せよ(春・山

電)

(本歌) 古今・雑下・よみ人しらず「わがいはほは三輪の山もと

恋しくはとぶらひきませ杉立るの門」

万葉・5・八一五「むつき立ち春のきたらばかくしこそ梅を

招きつつ楽しき終へめ」

この歌は、万葉歌をも本歌としているが、古今集の歌をも本歌としている。(万葉集では「三輪」を「檜原」と共に詠んでいる。「三輪の山」を「杉」と共に詠んでいるのは、この歌の本歌である古今

の歌が初めである。)この歌では「杉のえしのぎ」という語句が強すぎて、一首全体に調和していない感がある。

ほととぎすくべきよひとやたのままし人はたれかはくものふるまひ(夏・待郭公)

(本歌)古今・墨滅歌・衣通姫「わがせこがくべき宵なりささがにのくものふるまひかねてしるしも」

この歌は、「ほととぎす」と「人」とを対照させ、本歌の趣向を取り入れ、「くも」の「く」に「来」を掛けた技巧を用いて、工夫をこらしている。しかし、「くものふるまひ」という語句も、本歌のように詠めば効果的に「わが背子がくべき宵なり」と結びつき、待恋の情感を表すが、知家の歌のように下句を「人はたれかはくものふるまひ」と表現したのでは、「くものふるまひ」の語句が一首全体の調和を乱している。この歌は、趣向の奇抜さに走り過ぎて、優なるさまになっているとは言えないであろう。

冬きても人めはしげき道のべに草葉ぞはやく霜がれにける(冬・寒草)

(本歌)古今・冬・源宗于「山里は冬ぞさびしさまさりける人も草もかれぬと思へば」

この歌は、本歌の発想の一部を逆用するという趣向の奇をねらっているが、「人め」と「草」との対比という理知的な趣向に主眼があり、一首全体として情感の薄い歌になっていると思われる。

かえりみれば、知家は、かつて、
内裏名所百首

高砂の松は変らぬみどりさへなほあらたまる春の一しほ(春・

知家の歌における古典撰取の様相と変遷

高砂)

(本歌)古今・春上・源宗于「ときはなる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり」

山風に花やちりかひくもるらむ月さへかすむ志賀のうらなみ(春・志賀浦)

(本歌)古今・賀・業平「桜花ちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふがに」

洞院撰政家百首

かよひこし里はふしみの秋風に人の心のあれまくもをし(逢不遇恋)(新拾遺・恋四・入集)

(本歌)古今・雑下・よみ人しらず「いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし」

待ちわびぬ人の心のそらにのみたえてつれなき夕ぐれの雲(逢不遇恋)

(本歌)古今・恋二・忠岑「風吹けば嶺にわかるる白雲のたえつれなき君が心か」

のように、古今集からの本歌取の歌を優なるさまに詠んでいたのであるが、「宝治二年院百首」では、全く変ってきたのである。

五

知家の歌における古典撰取の変遷をたどってみると、光俊(真観)と連携して御子左派に反旗をひるがえしてから、その様相が変り、かつての古典撰取の優なるさまが変貌してしまっていることが知られる。それは、為家の歌風に対する反発に基づく対意識の激

しさに裏打ちされ、かつ、表現の自由を求めるあまりに、趣向の奇に傾き過ぎ、ひたすら万葉語を取り入れることなどにばかり心を用いたために、歌における優なるさまを犠牲にする結果に陥ったのであろうと考えられるのである。

〔注〕

- 1 暦仁二年（一二三八）五十七歳のとき出家。
- 2 嘉禎二年（一二三六）三十四歳のとき出家。
- 3 反御子左派の旗上げは、寛元四年（一二四六）十二月の「春日若宮歌合」のときである。御子左派と反御子左派との対立・抗争については、井上宗雄氏「真観をめぐって——鎌倉期歌壇史の一面——」和歌文学研究、第四号、昭32・8月、久保田淳氏「為家と光俊」国語と国文学、昭33・5月。
- 4 福田秀一氏「中世和歌史の研究」八一ページ。
- 5 竹下豊氏は「晩年の顕昭——『六百番歌合』を中心として——」において、「一首中、万葉語を使用した歌は三十八首」としておられるが、それは、「本稿でいう万葉語とは、『万葉集』に見える語ということであって、『古今集』以後に用いられる語も含む。」としておられるのによるからである。わたくしは、万葉語を、万葉集に用いられ、中古以後にはほとんど用いられなかった語と考えて取り上げた。
- 6 万葉集の歌の訓は日本古典文学大系によった。ただし、必要に応じて、新編国歌大観の訓を参照した。以下同じ。
新編国歌大観の訓は「ワタツミノトヨハタクモニイリヒサシ
コヨヒノツキヨスマアカクソ」(西本願寺本による訓)、

「わたつみのとよはたくもにいりひさしこよひのつくよさやくありこそ」(現代の万葉研究の立場で最も妥当と思われる新訓)となっている。

7 注5の論文。

8 俊成の万葉集に対する態度については、久保田淳氏「新古今歌人の研究」第二篇第三章第二節に詳しい。

9 「新校六百番歌合」(小西基一氏編)による。

10 「歌論集」(中世の文学) (久松潜一氏編校) 所収の「詠歌一体(甲本)」による。

11 この百首において家隆は、(A)草稿的性格を有する「前宮内卿落素百首」を作り、次に(B)東北大本「家隆百首」を作った。更に改編精選して(C)私家版決定稿ともいふべき「玉吟集百首」とした。片野達郎氏・安井久善氏著「校本洞院撰政家百首とその研究」二一九～二二二ページ。

12 百首のうち、伝わっている六十三首についてのもの。

13 赤羽淑氏編「藤原定家全歌集」による。

14 「ノートルダム清心女子大学、黒川本」を底本とし、「曼珠院本」「永青文庫本」「東大本」「内閣文庫本」を参照した。

15 注11の書による。

16 安井久善氏編著「宝治二年院百首とその研究」による。以下同じ。

ちなみに、宝治二年(一二四八)の年齢は、為家51、知家67、光俊46、基家46、行能70であった。

17 鈴木徳男氏が「『宝治百首』について」(中世文芸論稿、第

六号、昭55年3月)において、「『万葉集』からの本歌取りという万葉受容の典型が、宝治以後にあらわれた『万葉の名所とりてよめる姿』を庶幾する彼らの詠歌態度であり……」と指摘しておられる。

18 反御子左派の歌風の特質については、福田秀一氏「中世和歌史の研究」八一ページに的確に述べられている。